

# 白山信仰から生まれた伝統の踊り

## 「白鳥おどり」「白鳥の拝殿踊り」

## の歴史を学ぶ

郡上の夏を盛り上げる「郡上おどり」「白鳥おどり」「白鳥の拝殿踊り」ですが、今年は新型コロナウイルス感染症の影響により、開催見合わせとなりました。踊りのない「静かな夏」となりましたが、この機会だからこそ、踊りについて改めて考え、踊りの歴史や輪を絶やさないことが大切です。

今月号は、前回の「郡上おどり」と同様に「白鳥おどり」および「白鳥の拝殿踊り」についての歴史を学ぶきっかけとなるような内容としました。

### 踊りの原点は

### 白山信仰にあり

白鳥町は、その昔、富士山、立山と並ぶ三名山の一つ、白山への信仰の東海側の拠点「美濃馬場」として、登拝者は「山に千人」「麓に千人」といわれるほどにぎわいました。

郡上の盆踊りは、念仏踊りや風流踊りを源流としながら、白山民謡文化圏において、白山信仰との関わりの中で成立したと推測されています。

また、白山中宮長滝寺や石徹白の白山中居神社には、様々な修行者、登拝者たちが往來し、彼らが伝えた念仏踊りや歌念仏と白山を誉める唱歌が結合して、白鳥おどりの中で最も古い「場所踊り」になったと考えられています。

享保8年の長滝寺経聞坊「留記」の記事に「盆中お宮にて踊り申す事、奉行より停止の書状到来」という白山中宮長滝寺における盆踊り停止命令があったようにそれまで境内での盆踊りが慣習となっていたことが分かれます。

江戸中期以降の諸資料には、白山中宮長滝寺をはじめ、郡上郡上保筋の寺社境内において、盆踊りが毎年行われ、近郷から

も踊りに往來していたことが記されています。

江戸中期以来昭和前期まで、郡上の盆踊りは拝殿踊りとして続きました。神社の拝殿の中央には悪霊除けの花笠に由来する切子灯籠が吊り下げられ、美声自慢の若者たちが音頭を取り合い、板敷きの拝殿の床で下駄の音を鳴り響かせ、近所の若い衆も往來し、輪をつくって踊りました。

明治維新後、政府が推し進めた急速な欧米化政策は、盆踊りや村芝居等の民俗的風習を否定するものであり、これを受けて岐阜県は明治7年、盆踊り禁止の布達を出しました。しかし、盆踊りは廃絶することなく細々と受け継がれ、大正末期に伝統芸能の復活の機運が高まると、白鳥町でも盆踊り保存と伝承の動きが出ましたが、満州事変から太平洋戦争へと戦争が激化する中で消えていきました。

戦後、各地で盆踊りの復活の機運が高まると、昭和22年、「白鳥踊り保存会」が設立され、白鳥神社などで拝殿踊りとして踊り継がれてきた白山民謡文化圏の多くの盆踊りの種目の中から、代表的なくつつかの踊り種目を選んで「白鳥おどり」として整備しました。

昭和30年代に入ると、白鳥町

はこの踊りを観光に生かそうと、考え、切子灯籠を街頭に吊るし、笛、太鼓、三味線などの鳴り物を入れ、踊り屋台を囲んで、街頭で踊るようになりました。神社での拝殿踊りの伝統を生かした白鳥おどりは、郡上おどりと異なる特色を持ち、「神代(ドッコイサ)」、「世栄(エツサツサ)」などのテンポの速い踊りは、若者をはじめ多くの人たちに愛好されています。

一方、拝殿踊りの古い姿を保存伝承するために「白鳥拝殿踊り保存会」が組織され、毎年7月9日長滝白山神社、8月16日前谷白山神社、8月17日白鳥神社、8月20日野添貴船神社において、楽器や太鼓を伴わない本来の拝殿踊りが催されます。「白鳥の拝殿踊り」は、平成13年に岐阜県重要無形民俗文化財に指定され、平成15年には国選択無形民俗文化財に選ばれました。

白鳥おどりは、全国的な民謡ブームに乗って年々盛大になり、踊りの回数も増えました。昭和40年代からは、期間も7月下旬から8月下旬までになり、お盆の三日間は、徹夜で踊られます。奥美濃しる通りの夏の風物詩として、そして後世に保存伝承すべき貴重な民俗芸能として踊り継がれています。

白鳥の拝殿踊りは、江戸時代中期から、現在の白鳥町各地域の寺社の境内で、お盆の時期に踊られていたようですが、今では長滝白山神社・前谷白山神社・白鳥神社・貴船神社などに残るのみとなっています。(国選択無形民俗文化財)



## 国選択無形民俗文化財 白鳥の拝殿踊り8種目の紹介

### ①場所踊り

江戸時代の盆踊りの中心的な踊りで、8種目の中で最も古い踊りです。かつては郡上市内の八幡町以北に分布し、明治中期頃までは盛んに踊られていましたが、戦争を境にすたれて今はほとんど踊られていません。この踊りを知る古老によると、一晩中踊り明かし、動作は単純素朴、速度のゆるやかな踊りで、長時間踊り続けることが容易だったとのことでした。

### ②ドッコイサ (神代)

囃し言葉から呼ばれている種目名です。この「ドッコイサ」の囃し言葉を持つ踊りは、隣接の奥越前と岐阜県の関市板取で踊られています。またこの種目に発したものが伝来したものだともいわれています。農作業に疲れた一時、肩に手をかけたり、馬の背に手を乗せて「ドッコイサ」を歌いながら、一日の労働の終わりを喜び合ったであろう情景を思い取れます。

### ③エツツサ (世栄)

奥越前や岐阜県の関市板取、高山市庄川町にまで広がっている

る踊り種目です。輪の中で歌い手が音頭を取りながら逆回りに踊ります。全体的にテンポが速い白鳥の拝殿踊りの中でも、特にテンポが速いです。

### ④ヨイサツサ (老坂)

花づくし数え歌に続いて、宝暦騒動における名主善右衛門と娘おせきの物語が、口説きで歌われます。この踊りでも、輪の中で歌い手が音頭を取りながら逆回りで踊ります。

### ⑤猫の子

近世農家では糶を食べる害獣であるネズミを捕る猫が飼われていました。歌詞にもネズミを捕る猫が唱われており、この踊りは、子猫の所作を真似た踊りといわれています。作業歌から盆踊りに転化したものと思われるます。奥越前から石川県白山麓にまで流布している踊り種目であり、岐阜県では大和町・八幡町・美並町、さらに関市板取・洞戸にも伝承されています。

### ⑥シツチヨイ

隣接の福井県の大野市旧和泉村から大野市山間部、さらに平坦部にまで流布している種目で、岐阜県では白鳥町でしか踊られていない種目の一つです。白鳥町と大和町徳永のお寺づくし数え歌が歌われます。

### ⑦ヤツサカ (ハツ坂)

古くは、この地方で家屋を建てるのに先立ち、隣り近所の村人が集まり、石搗の労働奉仕をする習わしがありました。その時の歌が「ヤツサカ」であったといわれます。一説には、この地方の養蚕が盛んであった頃、生糸を紡ぐ糸引き娘が作業の時に歌ったともいわれます。いずれにしても労働歌から踊り歌になったものです。福井県の大野市真名川流域、関市板取でも踊られている曲の一つです。

### ⑧源助さん

江戸時代のお座敷歌でもあったと思われる種目で、白山民謡文化圏本来の種目ではないと思われまます。三河・越前にもあり、発祥・伝承経路は明らかではありませんが、大正期頃、愛知県の製糸工場へ女工に行っていた人たちが郷里へ伝えたようです。現在岐阜県では、白鳥町と高鷲町のみで踊られています。白鳥町では、この踊りを「場開きの踊り」としています。

他にも「さのさ」「よいとそりゃ」など数曲の演目が伝承されています。

各踊りの歴史を学び、奥深さを知れば、踊る楽しさは一層増すと思います。来年の夏は、踊り会場で楽しく踊りましょう！